

プロローグ

「はは、健太^{おまえ}みたいな鬼畜つかまえて
弟みだいい、なんて……うけるわあ」

「いや、だからおめでたい女
なんだつて
擦れてないから多分イケルぞ？」

「マジ？
で、顔はいいの？」

「ああ、まあそこそこの部類、
いい^{からだ}肉体してるぞムツチムチ！
アイッ
先輩にはもったいいねえわ」

「うっわ、やりてっ！」

「だからほら、あいつ、
来週から1ヶ月出張じゃね？」

「いいねえ、とりあえず媚薬^{くすり}で落として
仕込みまくりって？」

「そゆこと、1ヶ月あれば立派な
肉便器の出来上がりっつてな
ど？やる？」

「やるっ！」



「いっぱい……ンて……」

「お願い……いやらしい」と……」

や
犯られ妻
(いずみ 29歳)

なぜ…こんなことになっ
てしまったのでしょうか…

「あらあらいま…」



「っ!!!?!」

「…何人か…」

「うん…
今…入った…」

「わかってんな?
サービスサービ
スウ
だぞ」

「で、でも…」

「お、入ったか?」「よっし、客、いる?」

「あの…
もしもし…」

「あ、あ、あ…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「うん、うん、うん…」

「でも、なんだよ」

「は、恥ずかしいよ…
みんな…こっち見てる…」

「見てるじゃねえし、
見せるんだよっ！」

「こっちよく来るコンビニだし、
店員さんも…見てる…こっち」

（やあ…少しかがんだだけで…
アソコ…丸出しになってるう…）

「やあ…」

「いいからほら、ケツ
突き出してサービス
してやれっ」

「あ…」

（見てる…
見られてる…よお…）



全ての始まりは
あの日でした…

「こんばんわ」

「ども、いずみさん」

「あら、どうしたの？」

「いや、ほら先輩出張でしょ？
いずみさん一人で寂しい週末過ごしてるかなって」

「「「いつも先輩にいつもお世話になってるから、
連れてきました、一緒に酒でも飲みましょ？
色々買ってきたんで」

「ラフ、やさしいんだね」

「おじゃまします」

「いいわよ、入って？
今夜は盛り上がるっ」

結婚してから初めての夫の長期出張
独り寂しい時間を過ごしていた私は、
彼らの訪問を喜んで受け入れました

私より大分年下の彼ら…
こんな弟がいたらなあ、なんて

若い男の子達と話していると、
自分も幾分か若返ったよう…

とても楽しい時間を過ごしました…



楽しすぎたのかも……
しれません

ツボ……



あまり強くもないお酒を
彼らに勧められるまま飲んでいくうちに……

そう、きっとお酒のせい……

からだ
肉体が熱く……火照ってきて……



私も夫も性には割りと淡泊な方で……だから、どうしてなのか未だにわからないのですが……

肉体が熱く火照って…
私の女の部分が、ひどく疼いてきて…

（あ……うそ……
からだ
私の肉体……変……）

だめ、このコ達がいるのに……
そう思っても、いえ、そう思うからこそ
だったのでしょうか……

（やだ……ココ……あ、熱……い）

多分このとき私は、物欲しげな、淫らな雌の目で彼らを見ていたのでしょう……





彼らの手が、私の肉体に触れ…
だめ…だめよ、私は人妻…

「ほら、大丈夫
俺らでなくさめてあげるからさあ」

「あ、い…いや、
違うの…あ…」

「ね？遠慮しないで、ほら
ほら、ね？ね？」

「だめ…あ…
い、今触っちゃ…私に触っちゃ…
だめ…あつ…」

そんなにいやらしく…
そして優しく…私に触っちゃ…
だめ…お願い…



「あれ？いずみさん
どうしたの？」

彼らの目つきが変わりました

「やっぱ先輩いなくて
寂しいんだあ」

唇を…
夫に愛を囁き、キスをする
ための唇を…

「あむっ…？」

私、本当にそういう女じゃなくて…
夫のこと、愛してもいましたし…

「ぷは…あ…あはあ…」

あっさり奪われました…

「はむ…ちゅ…、あ
はあ…ちゅる…あむ…」

だめ…そう思っても
抵抗できませんでした

でも、彼の強引な…だけど優しく…
濃厚で淫靡なキスが…甘い唾液が…
私の唇を、舌を、そして心を蕩かしてしまった
のです…

初めてキスをしたのが、高校2年生の頃…

「あは…だ…
だめ…」

それから夫と結婚するまで、
男性経験がほとんどなかった私は…

キスって、相手の舌を、唇を…
食欲に吸って、絡めて、求めて…

3人の男の子達に次々と休みなく
唾液を注ぎ込まれ、それを飲み干して…

「だ…あむ…はむ
ちゅむ…あ…」

知りませんでした…

「や…やらあ…」

「おね…はむ、ちゅる
…がい…はむ…」

キスって…

キスって…
ああ…

理性が…
溶けちゃう…

す…

彼らの欲求…要求はエスカレート
します…

「ね、いずみさん」

「は…はいいい？」

「ねえ、いいでしょ？
ほら、ほら」

「だ…だあめ…」

「いいから、ほらあ
脱げってほら」

「だ、だめえ…」

「あ、お股開いちやだめえ…」

絶対に…だめ…夫以外の男性に
肉体を晒すなんて…

許されるはずありません…
私の肉体は夫のものだから…

「服、脱いでみよ」

「んん…」

そんなことできるはず
…ありません…

それなのに…私はこのとき…

「つて、いいからほら」

「やっ、だ…んっ」

見て…欲しかったんだと思います
気付けば…

「ああ…だめなの…
ホントはだめなのよ…」

「見る…だけ…
見せる…ただだから…」

自分から裸体を晒して…
ああ、なぜだか未だにわからないんです…

抵抗できなくて…
いえ、違います…

「ほれほれ、
ほれえ！」

「待つて、や…
ああ…」

自分でも信じられない…
夫の留守中に、夫の後輩の、
私より年下の男の子達に…

「ああ…あんまり
見ないで…恥ずか…しい…」

夫以外に見せたことのない
裸体を晒し…

そのことに…
異常に興奮していました…

（ああ…見られてるう…
だめ…ああ…）

（エッチな目で…見られ
ちゃってるう…）

「うわあ、いずみさん
やっぱいい乳してますねえ」

「はあっ…」

そして…
そのとき私は…

まるで自分から
見せつけるように…

彼らの生温かい息が…
私の肌を、乳首を…優しく撫でます

「ああ…ね？
もう…いいでしょ？ね？」

「ん…ん？あれ？
いずみさん、もしか
乳首起ってる？」

「そろかなら、なんか
ぷくぷくしてるけど？」

私の肉体はそれに
敏感に反応します…

恥ずかしいほど敏感に…

「あ、ちつ、違う…
そんなこと…んっ、ない…」

「そ…そんなこと…」





「じつかし、たまんねえな
この乳よ」

「あつ……！」

あつさり反故にされました…

「ほらほら、どう奥さん
感じる？ん？ほらっ」

「だめ……お願い……
み、見るだけ……あつ」

見るだけ……という約束は…

「ほら手に余るぜ
チヨッ柔らけえろ！」

「あつだ……だめっ
やつ……」

「はは、いずみさん
やつぱ感じてるね、エロいなあ」

筋張った男の手が…私の柔肌を…
乱暴に揉み解して…

乳首まで…

「きやうっ…」

「ほれ、奥さんどっ？
ほれほれ」

「だめっ、やっ、やめてえ…」

爪を立てられて…

弄られて…

「はうっ…」

「んっ、はうっ」

とても敏感な部分を

こねくり回されて…





彼らが許してくれるはずもなく...

「じゃあ、たっぷり可愛がつてあげるからね」

「お、お願い...
あっん、あんっ、んっ」

「うめっ、乳首めっ」

「んっ、んっ」

私自身も、だめ、なんて...
口先だけで、心は...

「だめ...乳首...
だめ...え...」

「ん？どして？
いずみさん？」

「あ、そう」

「乳首...弱いのお...」

彼らは空腹の獣の子のように…
私の乳首を求め…貪りました
私のソレも彼らの求めに敏感に応え…

乳首がちぎれるくらい、
吸われ、転がされ、噛まれ…

夫は優しいひとで、私の
嫌がる行為はしませんでした…
普段の私は、理性が…
快楽に溺れることを拒み、怖がり…
ですから夫との性行為も、必然的に
おとなしいものになっていました

が、彼らは、違いました…

「あああ…
だ…だめえ…はむうう」

まるで私が嫌がる行為の先にこそ、
本当の快楽があることを思い知らせるように…





結構長時間…だったと思います
乳首を徹底的に責められ、弄ばれ…

「ほら、奥さん
どしたの？ん？」

「ああ…んっ、んあっ」

「乳首だけでこんななるって、
どんだけ感じやすい肉体してんだって
ハナシだな」

何度か…イってしまったんだと…
思います…よく…覚えてないんですが…

「ほれほれ」

赤く充血して、必要以上
に膨らんだ乳首が…

「あっあっ」

自分のものだとは思
えませんでした…



大きさが、太さが、
形が、色が…

そして臭いが…

そして獣のような臭い…

それを3本も…
顔に、髪に擦りつけられて…
押しつけられて…

夫のそれとは違うことが
わかりました…

凶暴な…凶器のような…

肌を焼くような熱さ…
怖い…はずなのに…

私の雌の部分が…
逆にそれを強く求めていることに
気付きました…

気が付けば...

「いずみさん、ほら
ちゅーして、ちゅー」

「はむ...」

はしたなく...
むしゃぶりついてしまつて...

彼らに言われるがままに...

「そうそう
もっと、ちゅーって」

「んふう...」

「はは、大丈夫だよ奥さん、
そんながつつかなくても」

ぶはっ、んあっ、
んっ、んんっ、はあっ」

男の人のおち○ちん...
初めて...ぺろぺろって...

夢中でした…

「あら、ごちそう」

「んっんっ
んぽっ」

夫じゃない男性の
おチ○ポ…

その熱さに、臭いに、
味に…酔ってしまっていました…

「ほれ、奥さん
ほれほれ」

「はむっあむっ」

「エロいね、まさか
いずみさんがこんなにエロ妻
だったなんてねえ」

「あふ、んふうう」

「こっちも頼むよ奥さん」

自分が…ただのいやらしく下品な
雌だということを思い知りながら…

フェラチオ…の仕方なんて
知らなかったけど…

「いずみさん、
チ○ポ好き？ん？」

「はあ、あう」

「あら、あら」

いつの間にか…
下着を脱がされたのでしょうか

「おい、今のうち、
脱がせ、脱がせ」

「しっかし…
この女、必死に食ってんな(呆)」

「あむっ、はむ
はむうう」

「このまま呑み込まれそうな
勢いだぜ？あつ、奥さん、
歯立てちゃだめ、そう…
うん、そうそう」

「んっ、奥さん
いいコだねえ」

このときの私は、おチ○ポに
夢中で…気付きませんでした…
いえ、気付いても抵抗はしなかった
と思います



ぱっくり開かれた
私の雌の部分は…

「んっんっんっ
んんんんっ」

「いずみさん、ほら、
すっげ濡れてる、ほら」

「よっぽどチ○ポ好き
だったんだねえ」

「奥さん、ほら
もっと強く吸って
おら、おら、ん？」

ヒクヒクと物欲しげに…
下品に涎を垂らし…

なんの抵抗もなく…

彼らの指を飲込みました…

「あ…あはあ…」

さもおいしそうに…

根元まで…ああ…



女性の聖なる部分…
愛する夫の精を受け入れ…
愛する夫の子供の生を
この世に産み出す部分を…

彼らは遠慮なく…乱暴に…
指をねじ込み、拡げ、かき回し…

初めてされる雌の扱い…

「んあっんあっ
あっあっ、あああっっ」

「お、イッた、
いずみさあん、イッちやった？コレ」

今まで得てきたものとは異質の快感の
なかで、私は氣付かされていました…
女の肉^{めす}体^{にく}は男^{おす}専用であり、それ以外ではないことに…

「おら、もっとイけっ！
いずみ、おらっ！」

「あっあっ、んあっ」

「潮吹きちゃえ、おらっ！」

「ははっ、見ろ見ろ
吹いた、潮吹きたぞこの女」

「だめっ、あっ…
んあああつつあああつつ！」

「奥さん、潮吹き中申し訳ないけど
ほら、電話、電話」

そのときでした…

「ん？電話…、おっ！」

「おらっおらっ」

「あっ、だめっ、あっ、がっ」

「で……電話……？」

「おら、早く出ろよ」

「は、はい……もしもし……」

夫からの電話でした……
優しい夫は私が独りで寂しいだろうと……
心配して……電話をくれたのです

「あ、あなた……」

「いずみ、何してた？
独りで寂しかったか？」

「えっ、あ……その」

「ん？あれ、誰かいるの？」

愛する夫の声……
いつもなら聞いただけで安心する
はずの夫の声が、このときは私に別な
作用を及ぼしました

不思議でした…
夫の声を聞きながら…

「うん、あ、あのね…
け、健太君たちがね…
遊びに来て…んっ、くれ…つててえ…」

「お、そうか、
健太達が来てたのか」

「う、うん
んっ」

「いや、おまえが心配でさ…
ほら、ま、俺もおまえの声聞きたかった
んだけどさ…」

「あつ、うん…
わっ私…もっ、んっ」

普段の会話をしながら…
でも私は…私は普段の状態ではなく…



夫への罪悪感…いえ、
背徳感…でしょうか…

「さっきやっと仕事終わってさあ
今ホテル入ったとこ」

「そ、そう、んっ
た、大変だっ…んったねっ、んっ」

「いやまいったよ、で、
これから、こっちの連中と飯でもってさ」

「んっ、ほう…んっんっ
んぼっ…あまり…おほくはらっ
はい、んっ、で、んっんっ」

夫の後輩達に、夫との通話中に…
蹴られている…蹂躪されている…



私の肉体は夫の声を聞くたびに……
尚一層敏感に……反応してしまい……

「こら、いつも口にも入れて
しゃべるなって言ってるの
おまえだろ」

「んばっ……はあ……
ごめんなさい……その……
コレ……おいしく……て……はあ……」

「ん？どうした？
なんか様子が変だぞ？」

「えっ、そ、そんなこと……んっ
ない……よ、んっ」

彼らも決して手を緩めません……
私を起たせたり、転がしたり……
上に、下に、横に……

ああ、夫に無断で彼らの玩具に
されている私……

夫に助けを求めるといふ思考はこのときの
私にはなく……ただ、ただ……夫に気付かれてはいけないと……



挿入されました…
夫以外のモノを…おチ○ポ…を…

「んはあっ！だっだめっ！」

「ん？お、おい、どうした
いずみ？」

「いずみ？
どうした？おい、いずみ」

我慢できるはずありません…
彼らに長時間嬲られて…じらされて
いた私の肉体は、やっともらえた
ご褒美に…

「いずみ？おい、いずみてば」

喜び、打ち震え…
理性ははかなくも…

「なっ、んあっ、
あなたあっ…なんつで…
もなっ、つうっ」

「あ、先輩、お疲れ様です」

「お、健太か？」

「そうか、あんまり飲ますなよ
いずみ強くないの知ってるだろ？」

「あうあう
だめっ、だめえっ、あうあう」

「お願い抜いてえっ、
変につ、変になっちゃううっ」

「ええ、すみません先輩
ところで、どうですそっち？」

「ああ、いや思ったとおり
地方の営業所までは正確に通達
されないよなあ」

「でしょうねー、途中で中間
何度が挟むし、そこでいらぬ主観が
はいりますからねえ」

「いずみ、どうしたんだ？」

「いや、なんか多分
飲みすぎちゃったのになって…
いまトイレに行ってますよ」

「こっちの所長がちょっとな、
部下を制御しきれてないっつか」

「ああ、あの人でしょ？
一度研修の打ち上げで隣で飲んだこと
ありますよ、ちよっと優柔不断ってゆーか」

「そうなんだよな、
いや、本社からの通達に多少その所属長の主観が
入っても、ま、いいんだよ、しょうがない
どうしたって距離感や地域性があるからな」

「んぼっ、んごっ
んんっ、んごっ、んぼっ」

「結局、いざというとき責任とる
覚悟があるかってとこですよね」

「そーゆうことなんだよ」



「おら、もっとマ○の締めろ、
」とー」

「きやうっ」

「おらっ、言う」と聞けっ
「の雌豚っ」

「あうっ、はっはいっ
ききますう、言う」とききますからあ」

「お、の雌
おんな
ケツ叩くと締まるぜ、きやうっって」

「あ、ああ、」

「んん？
なんだあ、その目は…」

「ま、締めるところは締めて、
バシバシいかないと下に舐められるってことだ」

「イクぞオラっ！
全部飲み干せよっ！」

「あゝっ、んごおおっ」

「ごっちもだオラあつ！
孕め雌豚あつ！」

「ははは、さっすが先輩っ！
そのとおりっすよっ！！」



「いずみ、大丈夫か？」

「あ……あな……たあ……」

「結構飲んだのか？」

「はあ……うん……いっぱい……
いっぱい飲んじやった……
飲まされちゃった……
ふたつの……お口で……ああ……」

「ん……？しょうがないなあ、健太に介抱
してもらえよ、あいつなら安心だから」

「はい……あなた……
いっぱい……して……もら……う」

「あなた……」

「ん？なんだ？」

「こめんね……」

「いいよ……
じゃ、おやすみ」

「ん？ああ」

「あ、先輩いずみさん
戻ってきたんで
代わります」

この夜は……

「はい、あなた……おやす……み……」

いえ、この週末は…

「おらおらっ
いずみ、いいか、いいのか、おらっ！」

「ああ、いいっ！
いいいいっ、あああああっ」

ほとんど眠ることが出来ませんでした…

「おら、孕めっ、おらあっ！」

「あああつ、できちゃうう
赤ちゃんホントにできちゃううっ！」

彼らの精が、臭いが…
全身に沁み付くほどに…

犯され続けたのです…

「ほら、全部飲めよ」

「は…はいいい…、あはあ…」

彼らはその後も…
日を空けずやってきては…

「はは、いずみい
いい格好だな」

「おまえはこれから
ずっとその格好でいろよ、いいな？」

「は…はい…」

私の肉体を犯し貫きました…

「おら、いずみい
もっと、しつかりしゃぶれよ、ら」

「はい、こう…ですか…？
ああ…あんっ」

私は、私の肉体が日を追うことに夫のものではなく、
彼らの専用になっていくことを、恐怖し…しかし
抵抗することもできず…



「おらっおらっ、どうだおらっ！」

「ああ、いいいいいい」

何度も何度も…何度も犯され…
多分夫との性行為の回数以上に…

恥ずかしいことも…
いっぱいされて、させられて…

「ほら、はやくしろ、漏れちゃうぞ？」

「いやあ…だめ…
それだけは…お願い許してえ…」

夫どころか、本来誰にもみせるはずのない姿、行為まで
強要され…

仕込まれ…飲まされ…
唇が、舌が、喉奥が…

「飲めおらっ！」

「んぼっんごおおっ」

彼らのそれぞれの味を記憶
するほどに…

「お姉さん、エロいね…
やらせてよっ？ね？ね？」

「あ…だ…だめえ…」

ほとんど半裸でコンビニに
行かされたときは…

『うるせえ、変態女っ！
おらあっ！』

「あああっっ！」

路地裏に連れ込まれて…
無理やり…

「あっ、だっ…お願い…」

そこにいた若いコ達に…

「おらおらっ！
変態女あつ！喰らえおらっ！」

「あんっ、やんっ
あああんっあんっ……んっ」

「ぼつか、おま、
あんまでかい声出すなって、人くんぞ？」

「大丈夫だよ、来たらさっさと」も
やらせてやねばよっおらっおらっ」

「ああっ、だめえっ、お願いいっっ」



屋外で…すぐ近くには歩道があり、
いつ人が来てもおかしくない、そんなところで…

犬猫のように…
犯されました…

『うっつ、イクっつ!!』

『ああっ、熱いいいいっ』

つい先日までは
夫以外に男性経験がなく、性にも淡泊で…
「慎み」を持っていたはずの私が…

私の肉体が…こんな場所で、こんな獣のように
犯されて…でもそれを喜び受け入れている…



私が…

「あっあっ、またっ…
ああっっ」

今までの私では
なくなっていくのを…

でも…

「はあ…あ…熱…い…
なか…胎内に…いっぱい…い…あは…」

一匹の雌に生まれ変わりつつある自分に…
喜びに…本能に…
抗うことはできませんでした

怖いと感じながら…

「ああっ、うううっ」

あっ

うっ

うっ

うっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ



そして…

「あ、もしもし」

「はい、あなた」

「おまたせ、明日帰るよ」

「あ…そう…」

「ごめんね、
寂しかったろ？」

「ううん、あなた
私こそごめんね」

「うん…とても…
ちゅ、ちゅぶ、寂しかった…」

「はあ…あ…
ちゅる…ちゅ、ちゅぶ」

私、もう…
あなたの妻じゃないの…

「でも…」

「健太君達…
毎日、いっぱい…いっぱい、いっぱい…
慰めてくれたよ…」

「この」
おんな
達の玩具なのよ…」



あとがき

このような拙い作品に最後までお付き合いいただき、誠に、誠にありがとうございました。

さて、今回の拙作は、以前描いた「寝取られ妻 いずみ」のパート2です。

パート2とはいえ、時系列的には前作以前のお話となります。前作ではすでに寝取られ済みでしたので、寝取られる瞬間を描いてみました。

明らかに顔が别人的なところは…すみません、私の力はこんなものです…。

まあ、前作とは関係なく読めるように、と一応気を付けて描きましたので、前作を読んでいない方は別に読む必要ないと思います。

ちなみに、「いずみさん」にはモデルがおります。

某有名傑作名作スペシャル日常マンガに、苗字みたいな名前の女の子が出てきまして、そのママさんがモデルです。

本当はもっと似せて描きたかったのですが…まあ、私の力はこんなものです…(2度目)。

そのうち、画力が飛躍的に向上したら、そのママさんの同人誌を描いてみたいなあ…と考えております。

(ホントは以前描いたんですけど、ちょっとやっぱり下手すぎてボツにしました…)

絵も色も構成も台詞も…全てが未熟な私ですが、好きでやってることなので、これからも精進していきたいと考えております。

何度でも申し上げます。

拙い作品を手にとっていただき、さらに最後までお付き合いいただき、誠にありがとうございました。